



## 統計から社会の実情を読み取る

### 第53回　日本人の宗教心について

本川 裕

Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。助国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データが語る日本人の大きな誤解」(日本経済新聞出版社、2013年)等。



#### 日本人の宗教心の推移と特徴

日本人の宗教心は高まって行きつつあるのだろうか、それとも衰えて行きつつあるのだろうか。

これについて、5年おきに同じ設問の意識調査を長期的に継続実施している統計数理研究所の調査結果を、まず、見てみよう。宗教心に関しては二つの設問が主なものである。すなわち、「あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか?」と「それでは、今までの宗教にはかかわりなく、『宗教的な心』というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか?」である。

図1には、この二つの設問へのポジティブな選択肢への回答比率を示した。

結果は、「信仰や信心をもっている」はほぼ3割前後、「宗教的な心は大切」はこれを大きく上回る7割前後であり、両方とも、ほぼ横ばいか、やや低下気味の推移といえよう。大きな変化が起こっているようには見えない。宗教心については年齢とともに高まる加齢効果がある

ので、高齢者比率の増加により回答が上支えされているのは確かである。ここでは示していないが、年齢構成に変化がないと仮定して、年齢調整をした値の推移を調べてみると、図1よりもやや低下傾向が目立つようになる。それでも、戦後いろいろな面で大きく変わった日本人の意識の中では、余り変わらない項目と考えることができる。

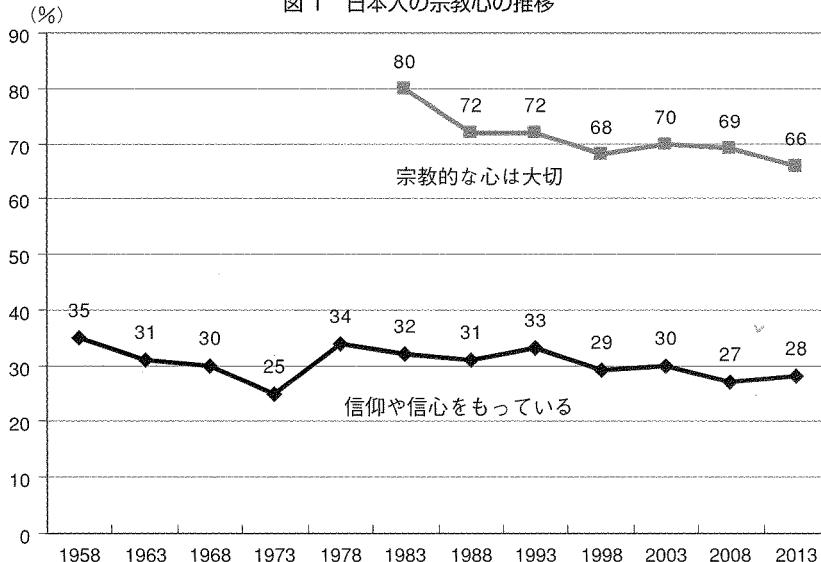
「信仰や信心をもっている」より「もっていない」人が多い、すなわち無宗教の人が多いにもかかわらず、宗教心は大切にするのがどうやら日本人の不变の考え方のようである。

こうした日本人の考え方は、諸外国と比較して特殊なのだろうか、それともよくあるパターンなのであろうか。

この調査を継続実施している統計数理研究所では、この点を確かめるため、これと全く同じ設問を含んだ国際調査を実施している。その結果を図2に相関図であらわした。

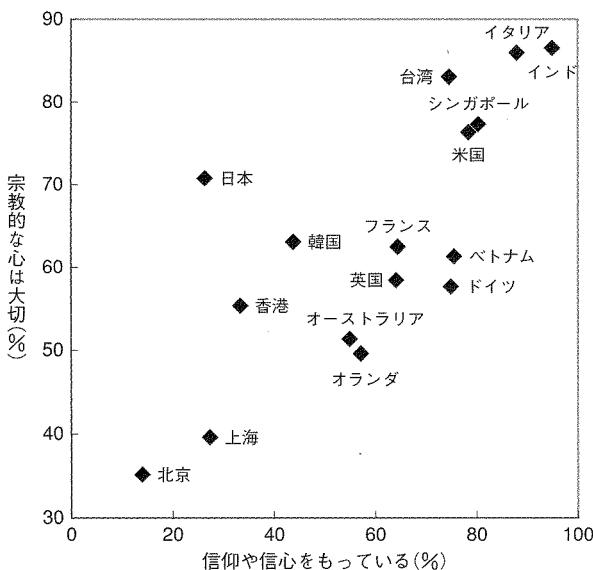
X軸に「信仰や信心をもっている」の比率(すなわち無宗教の者が多いかどうかの比率)、Y

図1 日本人の宗教心の推移



資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

図2 無宗教だが宗教心は大切にする日本人



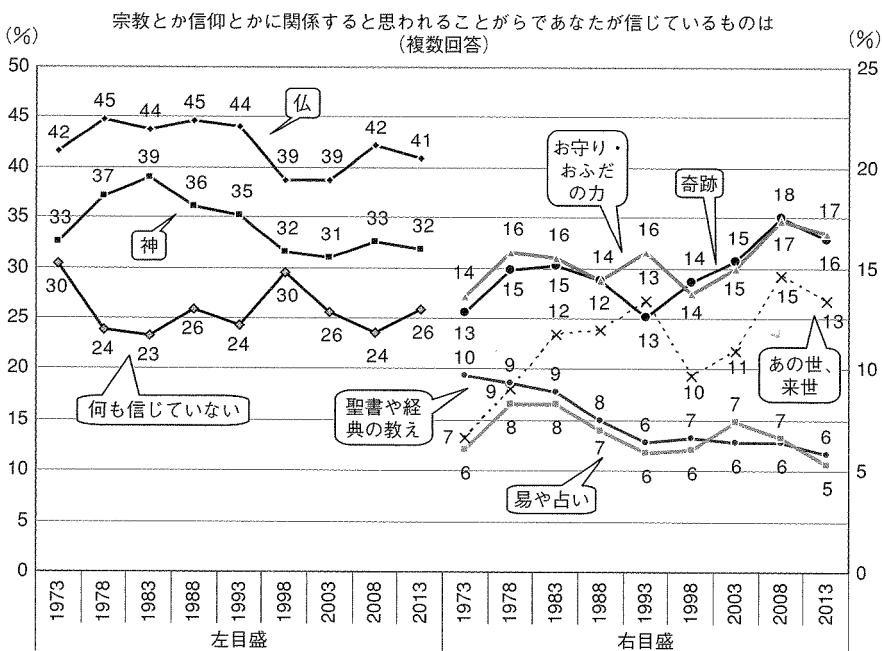
(原データ)				
国名・地域名	信仰あり	宗教心は大切	調査年次	サンプル数
日本	26.2%	70.8%	2010	852
米国	78.3%	76.3%	2010	1,002
北京	14.0%	35.2%	2011	1,000
上海	27.3%	39.7%	2011	1,000
台湾	74.7%	83.1%	2011	1,000
香港	33.2%	55.4%	2011	1,000
韓国	43.8%	63.0%	2012	1,005
オーストラリア	54.8%	51.3%	2012	801
シンガポール	80.4%	77.4%	2012	1,021
インド	94.9%	86.5%	2013	2,030
ベトナム	75.4%	61.3%	2013	1,000
イタリア	87.8%	86.0%	1992	1,048
フランス	64.4%	62.5%	1987	1,013
ドイツ	74.8%	57.6%	1987	1,000
オランダ	57.1%	49.6%	1993	1,083
英国	64.2%	58.5%	1987	1,043

資料) 統計数理研究所「7ヶ国比較調査」(1987~93年)、「アジア・太平洋価値観国際比較調査」(2010~2013年)

軸に「宗教的な心は大切」の比率をとってみると、両者は、ほぼパラレルだということが分かる。無宗教の者が少ないイタリアやインドのような国では宗教心も大切だと考えているし、逆

に、中国の北京や上海、あるいはオーストラリアやオランダのように欧米の中では無宗教の者が多い国や地域では、宗教心もそれほど大切とは思われていない。

図3 宗教や信仰のうえで何を信じているか



資料) NHK 放送文化研究所「第9回「日本人の意識」調査(2013)結果の概要」

これが世界標準の宗教に関する考え方である。

ところが、日本はかなり変わっている。無宗教の者が多い割には、宗教心を大切にする者がやけに多いのである。これを、信仰や信心とまではいえない山川草木や神社などに対するアニズム的な宗教心が強いと考えるか、あるいは、キリスト教、イスラム教、仏教といった教義宗教を嫌う気質があると考えるかは、見方次第であろう。

この連載の今年の9月号「死後の世界を信じるか」では、日本人の祖先の靈的な力への感受性が先進国では普通見られないほど非常に高い点を見たが、これを思い出すと原始宗教的な宗教心が強いとも思える。他方、日本の歴史をさかのぼり、外来宗教を在来宗教と調和させた空海以来の「神仏混淆」の考え方を自然に受け入れてきたことを振り返ると日本人の教義へのこだわりのなさがうかがえよう。統計数理研究所

の所長として一連の調査を企画実施した統計学者の林知己夫は、これが影響して、キリスト教などのように自分たちと違うものを排斥する教義をもつ排他的な宗教は、日本では広まらないと考えた(林知己夫(1995)p.72~73)。

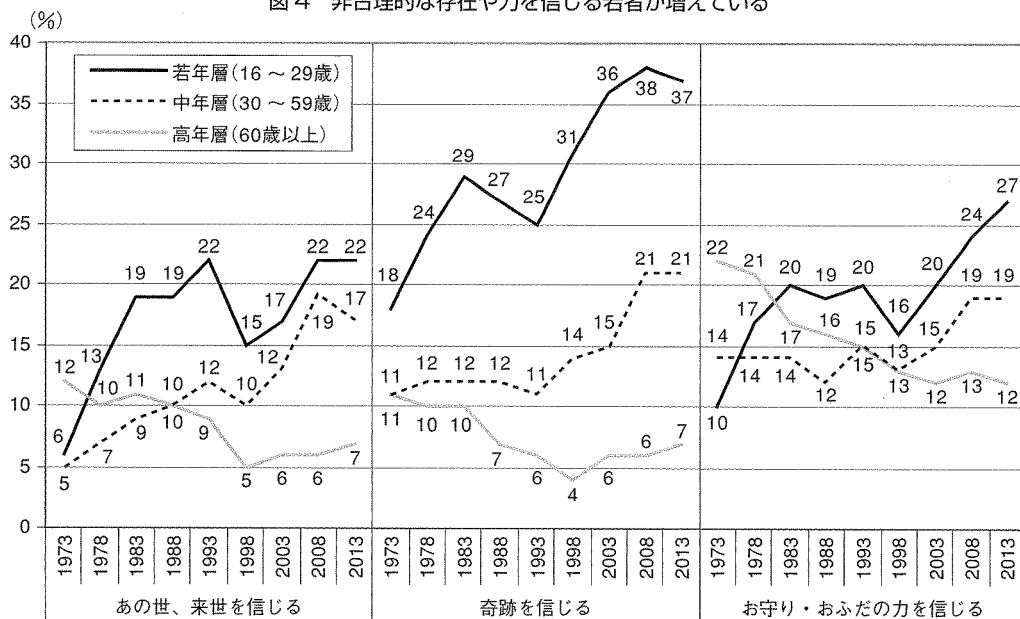
## 信じるもの的内容や若者の宗教心の動向

それでは、次に、もう少し宗教心の内容に踏み込んで日本人の意識変化を見てみよう。

ここで取り上げるのは、統計数理研究所の調査とともにやはり5年おきに長期的に継続調査されている点で貴重なNHK放送文化研究所の「宗教や信仰のうえで何を信じているか」についての調査結果である(図3)。

これを見ると、「神」、「仏」や「聖書や経典の教え」についてはやや信じる者が減る傾向にある一方で、「奇跡」や「お守り・おふだの力」、

図4 非合理的な存在や力を信じる若者が増えている



資料) NHK 放送文化研究所「現代日本人の意識構造〔第7版〕」「現代日本人の意識構造〔第8版〕」

あるいは「あの世、来世」については、信じる者が増えているという傾向が認められる。

こうした対照的な動きには、若者の新しい宗教心の動向が大きく影響している。図4には、信じる者が増えている三つの項目について年齢層別の動きを示した。いずれの項目についても、高年層では信じる割合が低下傾向であるのに対して、若年層では信じる割合が大きな増加傾向にある点が印象的である。

高度成長期に近代合理主義を是とする教育を受けた団塊の世代末期ともいえる私などの目には、若者が非合理的な存在や力を信じるようになっているように見える。逆に、新しく高年層となった団塊の世代は、旧来の高年層と異なり、非合理的なものは信じられないである。

オウム真理教のような非合理的な宗教活動、あるいはそれより深刻なことだが、非合理的な目標を掲げる政治運動が、今後、こうした考え方

方の変化を基礎に勢力を増すことがあり得るのであろうか。果たしてこれは、イスラム原理主義運動やそれに対して非合理的に反撃した米国との戦争などと国境を越えて通底している潮流なのであろうか。

それとも、異なる教義同士の対立を嫌い、特定の宗教を信じないが、自然や運命に対して人々に謙虚さを抱かせる宗教心そのものは失わないという日本人特有の態度が若者を中心にますます強まっていることのあらわれであり、宗教対立に悩む世界への日本人の貢献の可能性が高まっていると考えられるのであろうか。

人によって見方は異なるものの、日本人の宗教心についてのデータには、いろいろ考えさせるものが詰まっているようだ。

#### \*参考文献

- [1] 林知己夫 (1995)『数字からみた日本人のこころ』徳間書店。